

家庭における性教育の実態と意識 —— 大学生調査を通して ——
福岡教育大 高橋久美子

目的 人間の生き方や家族関係のあり方に深くかかわる問題として、性教育はとりわけ重要である。近年、性教育の必要性については社会的に関心が高まってきている。すでに実施した大学生の親役割についての調査から、大多数の者が家庭でも性教育が必要であると考えていることがわかった。そこで本研究ではさらに、彼らが親として家庭でどのような内容の性教育が必要であると考えているか、これまで家庭と学校においてどのような性教育を受けてきたかを明らかにした。具体的には、幼少時の性に関する質問と親の態度、性に関する悩みと親への相談の有無、親から受けた性教育と親として必要と思う性教育の内容の差異、学校教育が及ぼす影響について検討した。

方法 調査は1993年12月に行った。親役割についての調査と同様に、福岡教育大学の3～4年生を対象とした。分析に用いたサンプルの数は男子 323人、女子 367人である。

結果 幼い時に性に関する質問をして話題をそらされたりした者が3～4割、恥ずかしかったので質問はしなかったという者が3～4割いる。多くの者がこれまで性に関する悩みや不安をもったことがあるが、親に相談したことがある者は2割にすぎず、ほとんどの項目で親に相談しても仕方がないと考えている者が多い。性に関する事柄について、悩み相談の少なさは日頃の話し合いや指導の乏しさと関連がある。親からは性教育をほとんど受けてないが、とりあげた10項目について親としては家庭で必要性を認める者が多い。とくに生理的・知識的な内容の項目で多く、学校で受けた性教育が親として家庭で必要と考える性教育の内容に影響を及ぼしている。